

1 その他の取組

(1) 奈良TIME【フィールドワーク】について

＜対 象＞ 第2学年

＜目 的＞

- (1) 郷土の伝統、文化等に対する興味関心や理解を深める。
- (2) 伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を養う。
- (3) 国際社会の中で自立した社会人として生きる力を身につける。
- (4) 3つの研究課題領域「観光・歴史遺産」「国際協力」「生命と環境」に関する理解を深めさせ、主体的にテーマを設定し、課題研究を実施するための支援を行う。

＜実施内容＞

5月8日（火）と5月29日（火）の2日間、クラスを1・3・5・7・9組、2・4・6・8・10組の2グループに分け、午後の時間を利用して実施した。フィールドワークは1日一カ所、合計で二カ所参加出来るようにした。また、それぞれのフィールドワーク先と3つの課題研究領域の関係を示し、2日とも同じ課題研究領域から選ぶことも、異なる課題研究領域から選ぶこともできるようにした。実施前には質問項目を挙げることで事前研修を行い、ワークシートに記入させた。また、実施後にはフィールドワークを通して知ったこと、学んだことや新たな疑問点などをワークシートにまとめた。

＜フィールドワーク内容＞

A1	唐招提寺	講座名	ボランティアガイドさんから学ぼう
【活動内容】 電車に乗り、西の京駅で下車してボランティアガイドの方々と合流。10名程のグループに分かれて、各グループにつき1名のガイドの方についていただき、唐招提寺を案内していただいた。唐招提寺を巡りながら、その歴史やそれぞれの仏像にまつわる秘話、また仏教の教えについてお話していただき、最後ガイドの方々に、日頃ガイドで経験していることやコミュニケーションでの苦労等について質問した。ガイドの方々の中には、中国語を話される方や通訳士の資格をお持ちの方もいらっしゃり、様々な興味深い話を聞くことができた。			
【参加生徒の様子】 1回目は悪天候で傘を差しながらの参拝になったが、生徒たちは質問をしながら熱心に話を聞いていた。ガイドの方々の中には海外在住経験のある方もいらっしゃり、ボランティアガイドのことに限らず、海外での暮らしや文化的なお話も聞かせていただくことができた。			
【参加生徒の感想】 <ul style="list-style-type: none">・ 仏教の伝統や今の暮らしとの関係がわかった。・ 外国の人と自分のことや自分の国のことについて話すときは自己表現力が大切であるということが発見できた。・ 今後観光客はさらに増えると予測されるが、若いガイドがいないという課題を発見した。畝傍高校のようなSGH校や外国語を専門的に勉強している大学生など、外国語を使いたい、社会貢献をしたいなどの傾向のあるところを対象を絞って募集したらいいと思う。・ 唐招提寺の中は段差などが多く、スロープなどを設置すべき。			

A 2	吉野郡川上村	講座名	奈良県の林業と木材の活用
<p>活動内容</p> <p>学校からバスに乗り、約1時間15分で川上村上多古地区へ。林道を約10分程度歩き、人工林の植林現場へ。そこで、山守さんから樹齢65年の木材の現場を説明してもらう。また、約10分歩き、樹齢85年と200年の植林現場へ。吉野林業の特徴である、密植とその後の間引きを繰り返し、長い年限をかけて木を育てていること。また、別の現場からヘリコプターで運んだ木材に筋が入っていることで価格が低下し採算が合わないことなどを説明していただく。</p> <p>その後、地元小学校の廃校跡に場所を移して、林業に関わっている様々な方たちのスライドを鑑賞。現場とスライドから、自分と森の関わりを考えるワークショップを行う。2年後(2020年)大学生になった自分、5年後(2023年)社会人になった自分の姿を想像し、自分と森がどう関わっているかを考え、それをお互い発表・披露して、今後の自分の生き方を考える参考にした。</p>			
<p>参加生徒の様子</p> <p>1回目は大雨であったが、とても熱心に話を聞いて取り組んでいた。また、廃校跡でのワークショップでも、自分と森との関わりを積極的に発言・披露していた。印象的だったのは、森というのが、非日常なのであまり森と関わりを深くすると、非日常の空間で森によって癒されるということができなくなるのではないかという意見があり、視点を面白く感じた。</p> <p>2回目は好天で、植林現場で、じっくりと話を聞くことができた。生徒も色々と質問もしていた。ワークショップでは、少し遠慮がちであり、なかなか意見が出ず、教員2人も発表し、また生徒を指名して発表させた。</p>			
<p>参加生徒の感想</p> <p>実際の植林現場を見学して、樹齢が様々な木を見て、林業というのが長いスパンの仕事だと改めて実感した。自分が植林した木が製品として生長するには、100年近くかかり、今製品として出荷する木材は先人が大切に育ててきたものである。そのように世代を超えて引き継がれる仕事というのが現代社会には非常に少なく、林業の難しさを感じた。また、自然相手の仕事であるので、出荷前の天候により木材価格が下落するなど、採算面で大変難しいことがわかった。その一方で、森の効用が保水や川の生態系などに大きく寄与していることから、森を守る大切さが、県外や国内外から注目されている。私たちは、奈良県に住みながら、奈良の良きところをあまりにも知らないことを気づかされ、もう少し地元について知ることの大切さを実感した。</p>			



A 3	宇陀市立病院	講座名	地域医療の取組
<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 院長より、病院の運営体制、設備の説明、現在の日本の医療の問題点、病院を取り巻く医療環境、宇陀地域の取り組みなどについてのプレゼンテーション ・ 看護部長より「看護師の立場から伝えたいこと」と題して、チーム医療や看護に関する説明 ・ 病院施設見学として、放射線科の見学、レントゲン、CT、MRIなど、最新の医療技術について救急治療室の見学。 			
<p>参加生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 病院には多くの診療科があり、医師、看護師だけでなく多くの方が働いていることや、2025年問題(多死社会)、地域包括ケアシステム、在宅医療、多職種連携、院外活動について、丁寧に説明していただいたので、大変熱心に聞き入っていた。 ・ 看護部長から看護師の役割、必要な資質などについてお話をいただき、熱心に聞いていた。 ・ 施設見学では放射線科や救急治療室を4班に分かれて見学をさせて頂いた。説明を熱心に聞き入っていた。 			




参加生徒の感想

- ・宇陀市立病院のことだけでなく、医療全体のことも詳しく知ることができた。
- ・看護部長さんのお話で、看護師の役割や必要な資質がよくわかった。「看護」とは人をよく見て必要な援助を行うことである。

A 4	奈良県第一浄化センター	講座名	水を守る
活動内容			
電車にてファミリー公園前で下車し奈良県流域下水道センター第一浄化センターを訪問。講義と映像教材で浄化センターの役割を学習。次に施設内を見学。水質検査を行う実験室、ゴミや泥の沈殿施設、微生物を用いた処理で浄水する設備などについて説明を受けた。その後、水質調査(汚泥の混合割合)の計算方法の講義と、顕微鏡により汚泥を分解する微生物を観察し、そのスケッチをさせていただいた。			
参加生徒の様子			
化学的な講義のときは、未学習の内容もあり苦手な生徒は少し苦しそうにしている場面もあったが、身のまわりの生活に直接関わる部分も多く、熱心に聞こうという姿勢がみられた。顕微鏡での微生物の観察は、実験の授業のような雰囲気もあり生き生きと活動していた。			
参加生徒の感想			
災害時の対応、施設の老朽化に対応する費用、施設の処理費用・勤務実態、下水道が普及していない地域に対する対応など、学習した内容について様々な感想が出ていた。			

A 5	森と水の源流館	講座名	源流学への誘い
活動内容			
2グループに分かれ、それぞれのグループに源流館のスタッフが1名ずつついて、館内を案内していただいた。展示物の解説や森林の機能の説明、川上村の歴史やダム建設の経緯など、いろいろな話があった。その中に水源地の村づくりを目指した「川上宣言」の話もあった。また、「源流の森シアター」では、映像を通して川の水が生み出されるしくみや源流の森の成り立ちなどを視聴した。その後、バスで近隣のあきつの小野公園へ移動し、蜻蛉の滝を見学したり、周辺を散策したりしながら、フィールドワークを行った。			
			
参加生徒の様子			
自然に関する興味・関心が高い生徒とそうでない生徒とでは、展示の見方や、説明を聞く様子に差があったように感じたが、概ね態度は良かった。ただ、積極的に質問する生徒が少なかったのは残念であった。また、源流館のスタッフが自然に関する簡単な質問(現代っ子にとっては難問?)をしても、プライドが邪魔をするのか、答える生徒が少なかった。所変わって、蜻蛉の滝周辺でのフィールドワークでは、実際の植物や昆虫などを間近に観察し、スタッフの方の話にも興味深そうに耳を傾けていた。「触ってみよう」、「匂いを嗅いでみよう」、「味を試してみよう」と声を掛けられると、恐る恐る触ってみたり観察したりしていた。			
参加生徒の感想			
「森の大切さが分かった」や「自然を利用する昔の人の知恵が学べた」など、肯定的な感想が多かった一方で、「課題が発見できなかった」や「解決する方法はない」といった回答も目立った。村の過疎化やそれに伴って水源地の森を管理する人材が不足している、また、生活様式の変化に伴って森林の利用機会が減少し、人々の関心が自然から離れている等々、課題は語られていたはずである。しかし、スタッフの説明が自然に親しんでもらおうと、植物や動物の話が多かったため、生徒にとっては課題が見えにくかったのかもしれない。さらには、普段訪れる来客が小学生中心のため、展示や説明が高校生向きでないといった感想を書いた生徒も複数いた。			

A 6	奈良市きたまちエリア	講座名	きたまちおこし
<p>活動内容</p> <p>奈良市鍋屋町にある初宮神社の集会所を訪れ、鍋屋町自治会長で奈良きたまちのまちづくりを考える会会長の八木富造氏から、きたまちの歴史の説明とまちづくりのとりくみについて話をいただいた。その後、10分ほど歩いて、古民家を再生した外国人を中心とした女性専用のゲストハウスである and smiles hostel を訪れ、ゲストハウスを始めるに至ったいきさつ、ゲストへのおもてなしで留意している点、ゲストハウスで実施しているきたまちのコミュニティ活動などについてプレゼンを用いて説明いただいた。その後はゲストハウスの見学をおこなった。</p>			
<p>参加生徒の様子</p> <p>少人数の講座で、第1希望の生徒ばかりということもあり、どの生徒も真剣に話を聞き、メモもとっていた。生徒にフィールドワーク後、記入させた報告書を見ると、話の内容のメモだけではなく、その内容について自分なりの意見や批判を記している者もいた。強いていうならば、話のあとにもう少し多くの質問が行われればと感じた。</p>			
<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大切なのは、ただ人を集めることではなく、実際に住んで快適だと感じてもらうこと、そのようなまちを作ることだと思った。ひとくちにまちおこしといっても、ただ一時的なブームをつくって人を集めるだけでは意味はなく、むしろ住民の迷惑になってしまう。心地よい日常をつくりあげることが大切なのではないかと思った。特別なことをせずとも、外国の方にとっては私たちの日常こそが非日常であり、日本人であっても隣家にこそ異文化はひそんでいるんだと認識させられた。 ・奈良が今後、どのようなまちになっていくのか、みんなで話し合ってみたいと思った。 ・(奈良を訪れる)外国人の方が、日本に対して興味を持っており勉強している。日本人がもっと勉強すべきだと思った。 			

A 7	五條市役所・ジビエール五條	講座名	ジビエって何? ～五條から学ぶ～
<p>活動内容</p> <p>五條市役所にて、産業環境部農林政策課課長補佐の泉井伸之様から、五條市の施設であるジビエール五條の設立の経緯と、現状・課題についてお話ししていただいた後、小型バスにてジビエール五條の見学を行った。ジビエール五條では、実際に捕獲されたイノシシ・シカの解体、精肉作業を見学した。</p>			
<p>参加生徒の様子</p> <p>説明、実地見学ともに興味を持って参加していた。写真撮影も許可されていたため、積極的に行っていた。実際の作業過程でにおいなどが気になって遠巻きにしている生徒もいたが、体調不良を訴える生徒は居なかった。</p>			
<p>参加生徒の感想</p> <p>実際に生物が食料に加工されていく作業を見学したため、命をいただくことのありがたさについての感想が多かった。また、獣害を減らす取り組みとしての公営の精肉場という側面から、ほかにどのような手段をとることができるのか、現状の課題を解決していくためにはどのような方法があるかを考えている感想もみられた。</p>			

A 8	橿原市今井町	講座名	ブライマイ～今井町のまちなみ散策とその発信～
<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今井まちなみ交流センター「華薨」で、今井町全体の模型を見ながら、歴史と町並み保存の現状と課題等について学んだ。 ・春日神社を通り抜け、今西家住宅を見学させていただく。今西家の歴史、住宅建築の特徴や工夫について、今西さんから説明をお聞きした。 ・称念寺では、住職さんからお寺の歴史についてお話をお聞きし、解体修理中の本堂では県教育委員会の担当者から現場で詳細な説明をお聞きした。 ・その後、今井まちや館と旧米谷家住宅を見学した。 			
<p>参加生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今井まちなみ交流センターでは、職員の説明に熱心にメモをとったり、積極的に質問をする生徒もいた。 ・今西家住宅では、玄関戸の仕組みや当主の部屋のつくりなど様々な工夫が施されていることに興味をもった生徒が見られた。 ・称念寺本堂の解体修理現場では、柱の組み方や屋根瓦葺き方など、普段目にすることができない箇所も見学できて感激した様子が見られた。 			
<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今井町は一般的な歴史的町並みとは少し違って、とても閑静な住宅街で、常に観光客がいる訳ではないのに、景観にとっても気を遣っている感じがした。 ・景観を守るために電線を地下に埋めるなど、行政と一体となったさまざまな町並み保存への取り組みを知ることができた。今後は幅広い年齢層の人が意見を出し合って、魅力ある今井町を発信していくことができるかが課題であると思う。 			



B 1	奈良県産業振興総合センター	講座名	地域を支える行政の取り組みとテクノロジー
<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奈良県産業振興総合センター生活産業技術研究部の浅野部長からの挨拶の後、研究支援室の木田氏から施設の概要説明を伺った。 ・概要説明の後、2班に分かれて施設見学を行った。 <ol style="list-style-type: none"> 1. においかぎ付GCMS（食品グループ） 2. 味覚センサー（食品グループ） 3. FT-IR（繊維高グループ） 4. 機械的強度測定装置（繊維高グループ） 5. 電子顕微鏡（機械グループ） 6. 非接触三次元測定装置（機械グループ） 			
<p>参加生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設見学ではメモを取りながら熱心に説明に耳を傾けていた。また、興味のあることについては質問も行っていった。特に、電子顕微鏡や機械的強度測定装置は大学の工学部で取り組むような実験も行われたので、生徒にとっては大変興味深かったようである。 ・理型の生徒にとっては普段の物理や化学の授業の意義なども再確認できていたようであった。 ・センターの職員の方々が、昨年度実施したことを基に、生徒が興味を持つように色々な工夫をして頂いているのではと感じた。 			



参加生徒の感想

- ・奈良県にとっても中小企業が多く、奈良県の産業が中小企業によって支えられていること、企業が扱うにはとても高価なもの、(e x 電子顕微鏡など)を地域産業の振興に役立てていること、奈良県の人とは他県に働きに行っている割合が高いことなどがわかった。
- ・奈良県のあらゆる産業の発展を考えると、大企業の産業が発展すればよいと考えていたが、実際は奈良県にはとても中小企業が多く、中小企業によりよい発展が奈良県を発展させるのによいのではないかと考えが変わった。
- ・奈良県産業振興総合センターが中小企業に対してどのような支援をしているかをもっと多くの人々にPRをしていく方法や、中小企業同士の橋渡しをどのように行っていくべきかを考えようと思った。

B 2	大神神社	講座名	神道を学ぶ
<h3>活動内容</h3> <p>学校からJR畷傍駅まで移動(集合)、三輪駅下車、徒歩にて大神神社へ。権禰宜 平岡氏からご講義をいただく。日本人の宗教観は、初詣などに代表される神道、盆や葬儀などにみられる仏教に由来する行事、キリスト教徒ではないのにもかかわらずクリスマスイベントとして楽しむ風習など、多様にそれぞれの特性を取り入れ、生活に定着させているという特質があることをご教示くださった。その後、大神神社の拝殿に移動、ご神体が山であるため本殿を備えておらず拝殿のみであること、大直禰子(おおたねこ)神社にご案内くださり、明治の神仏分離以前は大御輪寺であったため、拝殿が寺の仕様であるということ、祭神である大直禰子命の説明等をしてくださった。</p>			
<h3>参加生徒の様子</h3> <p>1回目は大雨であり、移動の際は苦心していたが、熱心に話を聞いて取り組んでいた。また、大直禰子神社での質疑でも質問をするなど積極的に取り組んでいた。大神神社と蛇の関連についての質問があった。</p> <p>2回目は好天で、当日の参拝客も多数いらっしゃる中、間隙をぬって、丁寧にご教示を頂き、1回目よりも生徒の質問も活発であった。外国人参拝客への対応などの質問があった。なお、キャッシュレスの取組として、やがてお賽銭もカードやスマホで対応する日が来るかもしれないとのこと。</p>			
<h3>参加生徒の感想、</h3> <ul style="list-style-type: none">・神道自体、日本独特のもので、外国の宗教と異なる点をたくさん知ることができた。多神教という仏教の考え方が、一神教とは異なり、それも外国人が日本に興味を持つ点の一つだと思った。・大神神社には古事記や日本書紀に記されている歴史や言い伝えがたくさんあり、今まであまり気に留めていなかったが、おもしろい歴史的背景があり、知れてよかったと思った。今後ますます外国人の来日が増え、多くの外国人参拝客を迎えるにあたって、現在ホームページは外国語としては英語のみなので、中国語をはじめとする多言語での対応も必要であると感じた。同様に、神社のガイドとして、外国語を話せる人が常駐する必要性を感じるとともに、ホームページや案内用のリーフレット作成については、業者が翻訳してくれることもあるのではないかと考えた。(中国語・ハングルは準備段階)			



B 3	宇陀市松山地区	講座名	奈良の伝統産業と自然の関わりを知る
<p>活動内容</p> <p>40名の生徒が3つの班に分かれ、大宇陀観光ボランティアガイドさんに下に挙げる箇所をそれぞれ案内していただいた。道中、昔ながらの看板や家の造りなどについても歴史的観点から詳細に説明していただき、宇陀松山地区の変遷を学んだ。</p> <p>〈訪問先〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松山城西口関門 ・1867年創業 奈良漬け店「いせ弥」：奈良漬けの試食および店主による説明 ・1615年創業 宮内庁御用達「黒川本家」：吉野本葛製造過程DVD視聴および店主による説明 ・江戸時代中期創設 「森野旧薬園」：薬園と薬草についての見学および説明 ・和菓子店「田中日進堂」：吉野葛を使用した落雁の試食 ・まちづくりセンター「千軒舎」：宇陀の歴史を取り上げた紙芝居の鑑賞 			
<p>参加生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアガイドさんが写真を用いたりクイズ形式で説明をしたりと、生徒とのコミュニケーションを大事にしながらかつ丁寧に進めてくださったので、生徒たちも関心を持って説明を聞いていた。 ・訪問先が一カ所ではなく複数に及ぶこと、また説明ばかりではなく試食や散策もコースに含まれていたことから、生徒たちは飽きたり時間をもてあましたりすることなく、集中して取り組んでいた。 			
<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かつては城下町として栄え、織田家や徳川家とも関わりがあったという話は大変興味深かった。昔の人の知恵が活かされた建築様式や、昔ながらの薬局の看板などがそのままの形で多く残されており、楽しんで散策することができた。 ・葛や奈良漬けの製造には非常に手間がかけており、そうした説明を聞いてから試食することで、作り手への感謝の気持ちをもって美味しくいただけた。 ・宇陀市は観光地として大変魅力があるのに、交通の便があまりよくないところももったいなく思われた。コミュニティバスを運行させたり、道路の案内看板を増やすなどして、多くの人に知ってもらえるような工夫が必要だと思う。 			



B 4	御所浄水場	講座名	水をつくる
<p>活動内容</p> <p>会議室でパンフレットを受け取り、県営水道全般や浄水場の施設、浄水のしくみについて、パワーポイントを用いて説明を受けた。その後、屋外でそれぞれの施設をまわりながら、浄水の行程について詳しい説明を受けた。</p>			
<p>参加生徒の様子</p> <p>事前学習をしっかりとし、興味を持って見学して自分の考えをまとめている生徒もいれば、事前学習の段階から不十分な生徒もいた。施設を見学しているときにはいろんな疑問を口にし、まとめのプリントにも書いていたが、会議室では質問が出なかった。</p>			
<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・浄水場では十分な水質調査が行われていたが、そもそも川の水そのものをきれいにすべきではないか。家庭で水を流す際の注意や、市町村でのルール作りが必要。 ・巨大地震などの災害で浄水場が機能しなくなったとき、各市町村や県の水の確保の仕方や保存方法、また、それらが本当に機能し、市民が生活できるほどしっかりした仕組みができあがっているのかどうか調べたい。 ・南海トラフ地震や、テロに対する備えもできていることに感心した。今後それ以外で想定外の事態（水を介した伝染病など）が発生したときの対策も考えていくのが、これからの課題だと感じた。 			



B 5	五條市赤谷地区	講座名	砂防（S A B O）を知る
<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 国土交通省紀伊山系砂防事務所の担当者の方より、資料・パネルを用いて、平成23年台風12号の土砂災害による紀伊山地の被害状況の説明および赤谷地区の砂防事業に関する工事内容等の説明をうける。 崩落現場（赤谷地区）を見学する。 			
<p>参加生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 現場見学をすることで、テレビやインターネットによる情報からは感じることはできなかった台風による土砂災害の被害の大きさ、砂防堰堤のスケールの大きさを肌で感じ、驚いていた。 担当者の方の説明には、熱心に耳を傾けてメモをとり、見学時には、細かな工事内容にも関心を持ち、質問する者もいた。 			
<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> 土砂崩れをした現場を自分の目で見て、自然災害の恐ろしさ、二次災害防止の大切さを感じた。 土砂災害と林業との関係は切り離せない問題だと思う。林業を活性化するためにむやみな植林をしたことで、生態系への影響と土砂災害などの問題を引き起こしていることなど全体的な視点で捉えて、これからの生活と産業のあり方を考えていくべきだと思う。 深層崩壊前の姿と後の姿、また、崩壊して流れ込んだ土砂を間近で見て、想像よりも遥かに迫力があって、危険な現場だなと思った。 実際に砂防建設が行われている場所を訪れたことで、砂防が非常に大きな規模の土砂災害と対峙していること、台風などの影響で何度も被害にあったことも分かり、インターネットで見たことよりもはるかに大変な事業であることが分かった。 			



B 6	伊川自然農園	講座名	お茶と地域づくり
<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 伊川健一氏が運営されている「伊川自然農園」を訪問し、お茶摘み及びお茶づくり体験をする。 地域の課題である「耕作放棄地」の解消を目指し、農園を運営されている話を実際に伺うことで、奈良県内の課題に目を向けさせる機会を設ける。 			
<p>参加生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒は終始喜々として取り組んでいた。お茶つみ体験ではグループ対抗戦で、どのチームが一番多くのお茶を摘むことができるか、競いながら楽しんで取り組んでいた。斜面を歩くことであったり、茶木にいる虫に苦戦する場面もみられたが、新芽の美しさに魅了され、終了の声がかかってもなかなか手をとめない生徒も多くいた。 工房では摘んだ茶葉を加工する作業を実際に体験させて頂いた。それはもう賑やかな様子で、何度も繰り返す必要のある作業と暑さで、最後の方はやや疲れ気味であったが、自分たちで作ったばかりの新茶を入れて頂き、その美味しさに感激をしていた。 			
<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> 作業工程がこんなにあるとは思っておらず、日常の嗜好品となっているお茶に関心をもてた。 地域の課題に向き合っておられる伊川さんに脱帽する気持ちがある反面、発信の仕方や、今後の展開の仕方について、自分ならどのようにできるだろうかという疑問。 海外にも進出を考えておられる話を聞いて、「耕作放棄地」を開墾しているというモデルを研究してみようかと思っている。 			



B 7	大和郡山市内	講座名	まちづくりを学ぶ～大和郡山
<p>活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大和郡山市役所で、企画行政課の方から、「まちづくりアイデアサポート事業」・「ふるさと納税」についての説明を受け、質疑応答により理解を深めた。 ・大和郡山市の柳町商店街の町並みを散策し、商店街の現状や課題について考えた。 			
<p>参加生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市役所の方の説明を受けて、何回も熱心に質問し、理解を深めようとしていた。 ・金魚の改札や金魚の電話ボックスの見学を通して、商店街のまちづくりについて考えていた。 ・商店街に呉服店が多いこと、シャッターが閉まった店が多いこと、また地域の人々の姿は見られるが、観光している人の姿はないことなどを、参加者同士で話題にするなどして、観察していた。 			
<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイデアサポート事業は、未成年の学生の参加が今までにはなく、定年後の方が参加されている場合が多く、参加している年齢層が高い。これは、現代社会の状況と同じである。高校生や、若者にも参加できるような仕組みを作ることや、若い世代の人たちに興味を持ってもらうことが大切になってくるのではないかと考えたので、今後調べていきたい。 ・柳町商店街は、道路が狭く、事故が起きる可能性もある。商店街を安心して歩けるようにするには、道幅の改善や、駐車場の確保が必要である。また、金魚の電話ボックスなど魅力的なものもあるが、一部の店や道路の汚れが目立ち、暗い雰囲気になっている。商店街の清掃にも力を入れることが大切ではないかと考えたので、クリーンキャンペーンの有無など調べていきたい。 			



<成果と課題>

フィールドワークでの学習を通して、それぞれのテーマごとに課題を設定し、具体的な根拠となる資料を活用することや、それをわかりやすく説明するプレゼンテーション能力を向上させることができた。また、現代の課題の授業において各グループの発表をお互いに聞き、自分と違った意見や新しいものの考え方や捉え方を相互に交換することで、視野を広げることにつながった。

課題としては、この活動を通して身につけたスキルを自分の進路学習にどれだけ結びつけられるか、また、必要以上に放課後や休みに発表のための準備に時間を費やすことなどが見受けられることを踏まえ、各教科の学習活動とのバランスが上手くとれているかをチェックしていくことであろう。

(2) リーダーとしての技能・態度の育成について

① 大学との連携における模擬講義や見学会等の取り組みを通して

<目的>

大学の講義体験や、将来リーダーとして活躍する海外からの留学生や大学生との交流等を通して、世界に羽ばたく人材の育成を図る。

<実施概要>

A 京都大学見学会 平成30年8月7日(火)

【参加者】 畝傍高校生38名、京都大学生4名(畝傍高校出身) 京都大学海外留学生6名(東南アジア地域が中心)

【実施内容】 模擬講義、海外留学生との昼食会・交流会、研究室・施設見学、本校出身の大学生との懇談等

B 早稲田大学模擬講義 平成30年10月1日(月)

【参加者】 畝傍高校生16名

【実施内容】 模擬講義

〈実施報告〉

A 京都大学見学会

最初に農学部の近藤直教授、小杉緑子教授の2名による模擬講義（京都大学紹介や大学のグローバル化、世界の食糧問題と農業の課題、テクノロジー等について）を体験後、4グループに分かれて、6人の留学生との昼食会（農学部の学食を利用。1、2名の留学生を含むグループ別で）と交流会を実施した。交流会では英語をツールとして本校生徒から奈良県や本校の紹介を行い、留学生とのコミュニケーションを図った。6月に交流会を行うための事前学習会を2回行った上で臨んだので、一昨年度よりも活発な交流会を行うことができた。（昨年度は気象警報により交流会は中止をしている）

その後、3つのグループに分かれて以下の内容を実施した。第1グループは農学部研究室の見学を行った後、本校出身の京都大学生と構内見学。第2グループは本校出身の京都大学生との懇談会を行った後、その大学生の案内で構内見学。第3のグループは医学部人間健康科学科の研究室で学科や研究内容紹介を受けた後、研究内容の見学及び研究プログラム等の体験を行った。

○ 生徒の感想

（大学の講義体験について）

- ・ 専門的なものが多く、とても興味が持てた。
- ・ 日常的に耳にするものでありながら、世界的な問題であることを知り大変興味深かった。
- ・ 難しい問題を先生が分かりやすく講義してくださったので良かった。
- ・ 農学部では農業に関するだけでなく、食品や環境など様々なことを研究し、自然と対話し

ていくことが大切なことであることを知った。

- ・ 実際の大学での講義の雰囲気分かり、参加してよかった。

（留学生との交流について）

- ・ 相手にもっとうまく伝えられるように英語をさらに勉強すべきだと思った。
- ・ 日本文化のことを相手に説明するためにはさらに日本文化を深く知っておくべきだと感じた。
- ・ 英語で話さなければならないという状況はとても貴重だと感じた。
- ・ 留学生の方がとても丁寧に、親しみやすく話してくださったので、緊張せずに会話をすることができた。
- ・ 英語で会話を続けることはとても難しかったが、自分たちの話をしっかりと聞いてもらえて嬉しかった。

（研究室見学等について（農学部・医学部人間健康科学科））

- ・ 初めて見る機械を使った実験や、ペットボトルを使った実験を見ることができ、興味深かった。本格的な機械が設置されていてより良い研究ができると思った。
- ・ 作業療法士という職業を知り、障害が発生した場合にすごく重要な職業だということがよく分かった。



B 早稲田大学模擬講義

早稲田大学社会学部の北村能寛教授による、国際金融論をテーマにした模擬講義を体験した。講義タイトルは「赤字財政はなぜ問題か？国際間の資本移動から考えよう」である。資金循環の仕組みを理解したうえで、3人1組のグループを作ってワークショップを行うなど、生徒にとっては興味の沸く大変分かりやすい講義であった。



〈成果〉

- ・ 模擬講義体験および研究室見学は、高校の「学習」とは異なる学びの在り方を感じさせるとともに、第一線の研究現場の生の体験により将来の夢やあこがれへの確立につながった。
- ・ 海外からの留学生との交流は、公用語としての英語の重要性を感じさせるとともに、英語を母国語としない留学生との交流を通し、目指すべき将来の自分たちの海外での姿を考えさせるきっかけにできた。またアジア圏をはじめとする様々な地域からの留学生と交流により、それぞれの地域との文化の違いなどを実体験として感じさせることができた。
- ・ 自らが外国人に日本の文化を伝え、理解をしてもらうためには、まずは自らが日本の文化をより深く理解し、文化に関する自分なりの考えをもつことが大切であることに気付かせることができた。

(3) 外部フォーラム等への参加について

- ・ 全国高校生SGHフォーラムへの参加

(準備)

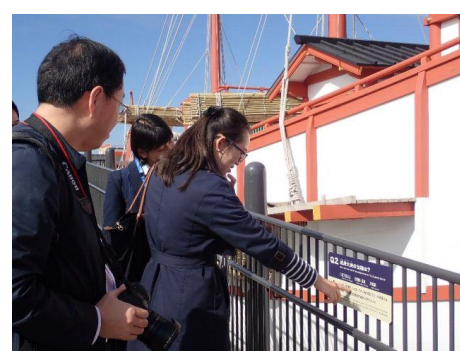
アドバンストコースのうちの有志4名(2年生)が、観光をテーマにした課題研究を発表することになった。発表内容の中心は、奈良県特に南部に外国人観光客を誘致するか、そしてそのリピーター

をいかに増やすかというものであった。彼らは10月中旬にシンガポールとマレーシアへの海外研修に行ったが、その時も、自分達が外国人観光客の立場に立って、シンガポールの観光地に外国人観光客に対するどのような工夫がされているかや、マレーシア（ジョホールバル）の高校訪問を行った際に、相手校の生徒に奈良の印象などについて聞き取りをおこなっていた。

11月1日「世界遺産教室」がアドバンストコースの講座として行われた。講師の久保美智代さんには、講演の後別教室に移って彼らの質問に答えていただき、世界各地の世界遺産の現状や遺産の保護と観光のあり方についてご教授いただいた。



11月3日、県国際課主催の「東アジア地方政府会合エクスカージョン」に参加。4名の生徒は中国や韓国の首長の方々とともに、平常宮跡歴史公園にある朱雀門や平城宮いぎない館、復原遣唐使船を見学した。その中で、日本や奈良に対する印象、展示物に対する意見等を聞き取り、それらの意見も踏まえながら以後、本格的な発表準備に入ることになった。



最終的に、熊野古道がある和歌山県田辺市がスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラと提携して行っている取組を紹介しながら、奈良市内の世界遺産を中心とした観光地を奈良市の姉妹都市と提携して外国人観光客を誘致する提案を発表内容の骨子とすることにした。

（当日）

12月15日、本校は前半が分科会、後半がポスターセッションという順番となった。分科会は「地域・観光・産業」の分科会に参加し、観光地の発展やその魅力の発信方法などをテーマに英語で討論を実施した。後半は、2回にわたり、英語でポスターセッションを行った。発表の制限時間を少しオーバーしたり、相手に伝えるためにはどのような工夫がいるかといった点について課題が残る部分もあったが、全国のいろんな学校の発表を聞いたり話をしていくことができ、有意義な発表会であったようである。次ページに、当日のポスターを掲載しておく。

The Way to Develop Nara into a Tourist City by Cooperating with Sister City

1. Background Information

- ① We noticed the differences between Nara and Singapore
- ② We became interested in the tourism development of Nara by attending the 9th East Asia Local and Regional Government Congress and a UNESCO world heritage class.

Goal: We want many foreign people to know about charms of Nara



[This is at the Congress]

2. Current Situation Analysis

- ① Multilingual announcement is not available
- ② No trash cans
- ③ Access to Nara is bad

Foreign people cannot feel charm in Nara
Few people repeat visitors

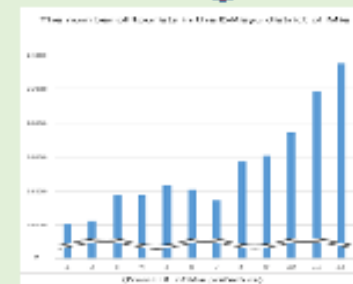


3. Hypothesis

If the number of repeat visitors is increased, the number of tourists will also be increased.

4. Verification

Efforts of "Kumanokodo" and "Routes of Santiago de Compostela"



Increase the number of repeat visitors

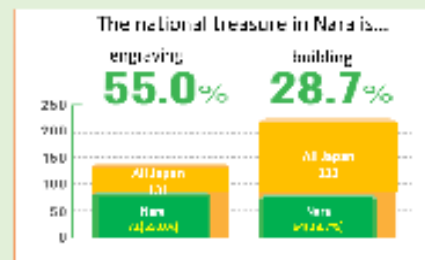
5. Recommendation

Cooperate with sister cities and jointly promote a tour of Goshuin

Nara ver. 8c's capitals, Nara, Xian, Gyeongju



An increase in repeat visitors can be expected



The percentage of Nara to the national treasures

6. Perspective, Task

It applies not only to the business in Nara city, but also to other World Heritage sites in the Nara prefecture

Lack; Advertisement, Trash cans, Multilingual guide, Hotel, Illustration of a sign



・「京都大学への架け橋」への参加

京都大学と奈良県との連携協定に基づく高大連携事業の一つとして、研究発表会「京都大学への架け橋」が実施され、奈良県内の連携校の生徒が発表及び見学で参加した。

〈目的〉

県内高校の行う探究活動に関する研究発表会を見学することで学校間交流を深め、刺激を受け、プレゼンテーション能力と主体的な問題解決能力の向上を図る

〈要項〉

日時：平成30年9月23日（日）12：30～15：35

場所：京都大学北部構内 理学研究科6号館（4F大講義室）

内容：県内高校生による研究探求活動の研究発表（各発表20分、質疑応答含む）4本
各研究発表の代表者及び大学院生3名によるパネルディスカッション等

〈概要〉

本校からは、13名の生徒が参加し発表を見学した。また、1組（2名）の生徒が「機械のココロから見る人間の心」と題して、AIによる短歌の機械翻訳分析に関する研究発表を行い、パネルディスカッションにも参加した。生徒は同じ県内高校生の発表に刺激を受けていた。理系よりの研究発表会であることを踏まえ、次年度以降、特に理系の研究発表ができるよう指導に努めたい。



・「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山への参加

2015年12月の国連総会で日本が提唱し、142カ国の共同提案の上、全会一致で採択された「世界津波の日（11月5日）」を踏まえ、次世代を担う世界の高校生が津波の脅威と対策について学ぶ「世界津波の日」高校生サミットは、2016年初めて高知県で開催され、2017年は沖縄で開催され、今年度は和歌山で開催された。本校からは第1回から毎年代表が参加しており、今年度は3名の生徒が参加し、分科会の司会（希望制）も務めた。同サミットは年々その規模を拡大し、今年度は日本を含む世界48カ国の高校生（国内から136名、海外から240名）が参加し、スタディツアーや防災に関する議論を通して日本の津波の歴史や防災・減災の取組を学ぶとともに、世界の高校生が今後の課題や自国での取組について英語で発表を行った。レセプションには国会議員や各国大使も参加され、多様な国際経験を積む貴重な機会となった。

〈要項〉

主催：和歌山県、和歌山県教育委員会

共催：国連国際防災戦略事務局（UNISDR）駐日事務所

後援：国土強靱化推進本部、内閣府、外務省、文部科学省、OECD

日時：2018年10月31日（水）～11月1日（木）

場所：和歌山ビッグホエール（和歌山県和歌山市手平2丁目1-1）

日程：10月31日 分科会、記念植樹、レセプション

11月 1日 分科会、講演会、総会

〈概要〉

毎年参加してきた本サミットであるが、今年度は津波防災の原点の地での開催ということもあり、例年を越える規模で開催され、参加した生徒からその規模に驚く声が聞かれた。生徒たちは、発表まで数か月、提供された膨大な共通資料を読み込み、それを踏まえてプランを作成し、フィールドワークを行い、最終的に国際会議での発表・質疑をこなすなど、貴重な経験をした。希望して分科会司会を務めるなど、積極的に参加し、英語をツールとして活用する体験は印象的だったとのことである。引率した英語科教員によると、主催からのフォローも行き届いており安心して参加することができたとの報告であった。

(4) ホームページによる研究成果の発信について

2014年度から指定を受けたスーパーグローバルハイスクールの事業に関して、本校のWebページ上でその取組等を発信している。本校Webページのフロントページにスーパーグローバルハイスクールのバナーを設け、その取組をすぐに閲覧できるようにしてある。Webページ中で本校の生徒の様子や取組を随時掲載することにより、世間により広く本校の取組を周知していくことができている。今年度、SGHの取組としてWebページ上で掲載した項目は以下の通りである。



- ・平成30年度SGHの取組
- ・グローバル国語講演会（平田オリザ先生）
- ・奈良先端科学技術大学院大学との交流
- ・未来創造会議を開催しました
- ・ISEN工科大学（フランス）との交流
- ・日米草の根交流について
- ・東アジア地方政府会合に参加しました
- ・世界遺産教室を開催しました
- ・国際理解講座を開催しました
- ・京都大学高大連携事業で出前授業を開催しました
- ・SGH発表会を開催しました

長期的に多くのSGHの取組を発信する方法としてはWebページ上での情報発信がもっとも適している。本校の取組をWebページで発信することにより、多くの学校、教育機関等との情報交換を促進することができている。

また、海外の交流校に見てもらふことを想定し、英語のWebページも公開している。これまで本校の歴史や校訓、アクセス、SGHの取組等を日本語だけでなく英語でも紹介してきた。

今年度は新たな英語のWebページの更新が十分にできなかったが、今後、国内外を問わず本校の取組を発信するために、日々の生徒の活動の様子についても英語で載せるなど、Webページの内容を充実させていけるよう取り組んでいきたい。



(5) 研修旅行について

本年度の研修旅行は昨年度に引き続き海外コースと国内コースを設定し、個人別にどちらに参加するかを自由に選択できるようにしたが、国内コース希望者が極めて少ない人数であったため、本人・保護者に説明し全員海外コースでの行程になることとの了解を得た。

<目的>

- (1) スーパーグローバルハイスクール事業の一環として、英語を公用語とする地域の人々との体験的な交流や、海外の文化に触れたり国際社会への関心・理解を深める研修に取り組み、広い視野から多様な視点に基づいて自らの進路を選択する力を身に付ける。
- (2) 豊かな発想力やコミュニケーション能力など、将来国際社会でグローバルリーダーとして活躍するために必要な資質・能力を養う一助とする。
- (3) 国際協力や環境問題などグローバルな課題の一端に触れ、各自の研究課題を深めるための体験的な学びの機会とする。
- (4) 集団生活を通して、人との関わりや自らの在り方・生き方を考え、公衆道徳や自己管理の重要性を学ぶ。

<行き先>

(国名) シンガポール・マレーシア(主な都市名) シンガポール・ジョホールバル

<期日等>

A班 平成30年10月16日(火)～平成30年10月20日(土) 3泊5日

B班 平成30年10月17日(水)～平成30年10月21日(日) 3泊5日

<本年度の行程の概略>

- 第1日目 移動・結団式・観光および記念撮影
- 第2日目 テーマ別研修
- 第3日目 クラス別研修
- 第4日目 B&Sプログラム
- 第5日目 移動

<生徒の研修について>

授業、ホームルーム、奈良 TIME の時間で事前指導を行った。テーマ別研修については、各クラスの研修旅行委員を放課後等に集め委員会を開き、テーマの設定・行程の作成・生徒全体へのプレゼン・しおりの作成・結団式と解散式の進行等の準備を行い、旅行中も委員を中心に活動した。B&Sプログラム（現地の大学生、大学院生とのフィールドワーク）については、各グループでテーマを設定し、事前に研修を行った上でフィールドワークを実施した。研修旅行後には、学んだことをグループごとにクラス内で全員が発表する機会を設け、研修内容を共有した。

<研修中の様子>



<各日程の研修内容について>

(1) 『テーマ別研修』（2日目）

研修旅行委員で研修テーマを設定し、訪問地や研修内容を検討し決定した。

《モデルコースの決定に向けて》

①テーマ設定について

コースごとに、SGHテーマ「観光・歴史遺産」「国際協力」「生命と環境」のいずれかを研修の大きなテーマとし、具体的なテーマを設定した。

②プログラム内容について

交流プログラム（マレーシア・ジョホールバル市内の高校、マレーシアのプライ村での交流）、体験型プログラム、学習型プログラムなどを提示し、検討した。

③モデルコース作成にあたって

- ・設定テーマを明確にし、研修目的が達成できるようなプランを作成した。
- ・できるだけB&Sやクラスの行程と重ならないように注意した。
- ・クラス別研修の訪問地と若干重なるものは、研修内容をより明確にして、クラス別研修との違いをはっきりとさせた。

決定に向けての主なスケジュールは以下の通りである。

- 4月中旬 研修旅行委員会の役割の説明
- 4月下旬 各研修旅行委員をA・B班毎に5つのグループに分けて、SGHテーマ（大テーマ）を決定し、学習テーマと訪問地の検討に入る。
- 5月上旬 行程案を作成し、旅行社との相談会を開く。
- 5月末 テーマ別研修選択コースの決定。（行程表を参照）
- 6月上旬 A・B班別々に学年集会を開き、研修旅行委員よりテーマ別に行程内容をプレゼンし、その後参加希望調査を行う。希望者の少なかった2コースを1つにまとめるなど、人数調整をし参加コースを決定。
- 6月中旬 各コースのリーダーを決定し、研修内容の詳細と修正を検討。
- 9月上旬 各コースの詳細を決定。マレーシアでの学校交流を行うコースは、夏休み中に、交流内容を検討し、9月に交流内容と進行の詳細を決定。
- 9月中旬 旅行社と担当教員・代表生徒との打ち合わせ
- 10月上旬 奈良 TIME の時間を利用して、テーマ別に集会を開き詳細の確認。

(2) 『クラス別研修』 (3日目)

クラス単位で、シンガポール国内の観光を中心に、様々な場所を散策したり施設を見学したりして、異文化や生活習慣の違いを肌で感じた。

(3) 『B&Sプログラム』 (4日目)

生徒6～8名が1グループとなり、日本に関心を持つ地元の大学生が案内役となり、班別にシンガポール市内研修を行うプログラムで、コミュニケーション力や積極性も自然と身につけ、国境を越えた相互理解を育むよい経験となった。事前に各グループで目的やテーマを検討し、訪問地を決定した。ホテルで現地の大学生と自己紹介、研修スケジュールの確認を行ってから出発し、所定の昼食場所でチェックを受け、最終の集合場所に到着した。事後アンケートで「実際訪れて研修内容が深まった」は約80%、「大学生と積極的に交流できた」と回答した生徒が約75%であった。事前の調査も十分に行えたようであるが、当日大学生との打合せで行き先が変更になることもあり、事前調査の限界もあるように思える。全体としては、所期の目標が達成されたと思われる。

<研修旅行委員会の取組>

各クラス4名の研修旅行委員を選出し、海外研修を生徒自らが計画し、自律し、実行していくことを目指した。

(1) 『テーマ別研修』の研修内容の決定に向けての取組

- ・4月末から、SGHテーマ「観光・歴史遺産」「国際協力」「生命と環境」を大テーマとして、A班とB班で各5グループに研修委員を分けた。昼食時や放課後に各グループが自主的に集まり、研修内容を検討した。5月末にA班とB班でそれぞれモデルコースを5つ決定した。
- ・6月に、A班とB班に分かれて全生徒にプレゼンテーションをし、希望コースを集約し参加者を決定した。ここでは、クラスの枠を越えたグループ編成とした。
- ・各コースのリーダーを決め、引率教員と共に行程の詳細を検討して、研修内容を決定した。

(2) しおりの作成

- ・クラス別、テーマ別、B&Sプログラムの行程がほぼ決定した段階で、しおりの作成に取りかかった。研修旅行委員長は挨拶文を担当し、その他のメンバーで挿絵の挿入、行程のチェック、現地で使える英語フレーズ集の作成、Q&A集の作成を担当した。

<成果と課題>

事後のアンケートでは、参加生徒ほぼ全員が満足したと答えている。初めての海外旅行という生徒も多く、事前は英語でコミュニケーションをとるということに不安を抱えていた者もある程度はいたが、現地の添乗員やガイドが親切に対応してくださったり、ある程度は日本語が通じる場面もあったので、徐々にではあるが英語を使うことにためらいもなくなり、旅行前よりは自信をつけて帰国できた生徒が多い。

また、文化や科学技術面では日本よりも先端のものに触れ、世界の技術に対抗するには日本に何が足りないのかを実感することができ、一方で日本の文化や技術の優れた面も再確認することができ、有意義な時間を過ごせたのではないかと感じる。

テーマ別研修のアンケートでは、交流部門（ジョホールバル市内の高校との学校交流・マレーシアプライ村での文化交流）でとくに満足度が高く、多くの生徒が直接人と関わりコミュニケーションをとることで国や言葉の壁を越えて心を通わすことができた。

昨年度以前からの課題であった過密スケジュールでの生徒の体調管理について、今年度は全体の行程に少しゆとりを持たせ、休息時間もきちんと確保できるように努めた。その結果か、重大な体調不良を訴える生徒は出てこなかったが、やはり日程の後半では疲労が溜まり、集中力が欠けた生徒や迅

速な行動がとれなくなる生徒が少し出てきたように感じる。来年度は行き先が台湾に変更になり、行程もこれまでより1日短くなるため、より過密な日程になることが予想されるので、生徒の健康や安全の管理をさらに徹底していく必要がある。また、金銭面では各家庭にかなりの負担をかけることになる。最近では日本に来る外国人留学生も多く、交流だけなら国内でも十分にその意義を果たすことができる。生徒アンケートでも、国内でもよいという意見も一定数あり、海外へ行くことの意義自体も再度確認していく必要があると考えられる。

<旅行中の様子>



<アンケートの結果>

研修旅行 アンケート集約

	項目	上段:A班(%), 下段B班(%)			
		①	②	③	④
全般	1 研修旅行全般の感想について 物足りなかった ① - ② - ③ - ④ 満足した	0.5% 1.0%	2.5% 2.1%	20.3% 11.4%	76.6% 85.5%
	2 あなたは研修旅行以前に海外渡航の経験がありましたか なかった ① - ② あった	70.1% 67.5%	29.9% 32.0%		
	3 研修旅行中の体調管理について できなかった ① - ② - ③ - ④ できた	1.5% 2.1%	11.2% 8.8%	24.9% 23.7%	62.4% 65.5%
	4 しおりの活用について しなかった ① - ② - ③ - ④ よく活用した	4.6% 5.7%	21.8% 16.5%	44.2% 47.9%	29.4% 29.9%
	5 ホテルの印象は よくなかった ① - ② - ③ - ④ よかった	0.0% 0.0%	3.6% 0.5%	26.4% 23.2%	70.1% 76.3%
	6 初日の夕食(中華「carpenter29」)は よくなかった ① - ② - ③ - ④ よかった	38.6% 35.1%	36.0% 37.1%	21.3% 24.2%	4.1% 3.6%
	7 ホテルの朝食(3日間バイキング)は よくなかった ① - ② - ③ - ④ よかった	1.5% 0.5%	8.1% 7.7%	29.4% 24.7%	60.9% 67.0%
テーマ別	8 訪れた場所の事前研修について 調べなかった ① - ② - ③ - ④ 十分調べた	13.2% 10.3%	38.1% 31.4%	40.6% 48.5%	8.1% 9.8%
	9 実際訪れた後研修内容は 全く深まらなかった ① - ② - ③ - ④ 非常に深まった	4.6% 1.6%	14.3% 6.2%	43.9% 43.0%	37.2% 49.2%
	10 2日目夕食(ラオバサ・サテバイザバイ) よくなかった ① - ② - ③ - ④ よかった	11.3% 4.6%	14.9% 6.2%	25.6% 26.8%	48.2% 62.4%
クラス別	11 訪れた場所の事前研修について 調べなかった ① - ② - ③ - ④ 十分調べた	14.2% 11.9%	40.1% 30.4%	38.6% 41.8%	7.1% 16.0%
	12 実際訪れた後研修内容は 全く深まらなかった ① - ② - ③ - ④ 非常に深まった	1.0% 0.0%	10.2% 5.7%	45.2% 37.6%	43.7% 56.7%
	13 3日目昼食(飲茶) よくなかった ① - ② - ③ - ④ よかった	10.7% 6.2%	27.4% 16.5%	42.1% 45.4%	19.8% 32.0%
	14 3日目夕食(チキンライス) よくなかった ① - ② - ③ - ④ よかった	8.2% 14.9%	19.9% 16.0%	38.8% 41.8%	33.2% 27.3%
B & S	15 訪れた場所の事前研修について 調べなかった ① - ② - ③ - ④ 十分調べた	11.7% 6.2%	33.0% 18.0%	43.1% 46.9%	12.2% 28.9%
	16 実際訪れた後研修内容は 全く深まらなかった ① - ② - ③ - ④ 非常に深まった	5.6% 1.5%	18.3% 6.7%	40.6% 41.8%	35.5% 50.0%
	17 現地学生との交流について 交流しなかった ① - ② - ③ - ④ 積極的に交流できた	6.1% 3.1%	25.9% 20.1%	36.5% 34.5%	31.5% 42.3%
	18 班別行動について 協力できなかった ① - ② - ③ - ④ 協力できた	2.5% 1.5%	9.6% 6.2%	41.1% 35.6%	46.7% 56.7%
	19 4日目の夕食(スチームポット)は よくなかった ① - ② - ③ - ④ よかった	8.2% 7.7%	21.9% 20.1%	40.3% 43.3%	29.6% 28.9%
20	JTB現地ガイドさんについて よくなかった ① - ② - ③ - ④ 非常にわかりやすかった	0.5% 0.5%	1.0% 4.7%	17.0% 27.7%	81.4% 67.0%
	21 ホテルでの規律ある行動は できなかった ① - ② - ③ - ④ しっかりできた	1.0% 1.6%	6.7% 10.0%	28.4% 32.6%	63.9% 55.8%
	22 旅行先での公衆マナーは 守れなかった ① - ② - ③ - ④ しっかり守れた	0.5% 0.5%	2.6% 1.1%	26.3% 25.3%	70.6% 73.2%
	23 英語でコミュニケーションを取ることに よくなかった ① - ② - ③ - ④ 積極的に使えた	5.2% 2.7%	36.6% 23.2%	46.9% 51.5%	11.3% 18.6%

<行程表> (A班のもの。B班は全体が1日うしろへずれる)

奈良県立畝傍高等学校 様 2018年度海外研修シンガポール A班(1・5・6・8・9組)

旅行期間 2018年10月16日(火)~20日(土)

日程	行程	食事	宿泊地	
2018年 10/16 (火)	<p>《大和八木駅西口 6:50バス乗車集合厳守》 貸切バス(岸和田 SA 経由) 50 シンガポール航空 619 便 ※入国審査 大和八木駅 → 関西空港 → チャンギ空港 → マーライオン公園 → セントーサ島 7:00 出発 8:30/10:55 発 16:40 着/18:00 18:30/19:30 20:00/20:30 21:00 頃</p>	<p>朝: 餅内 昼: 餅内 夕: 中華</p>	<p>【シンガポール】 リゾートワールド セントーサ内 ハードロックホテル 3 連泊</p>	
10/17 (水)	<p>クママ観光コースの一日 ●テマ1① ホテル 7:30 10:00~10:30/14:30 15:10/16:30 18:30 頃</p> <p>●テマ2② ホテル 7:30 9:00~10:00/12:00~13:00 13:30/14:20 14:40/15:00 15:15/16:30 18:30 頃</p> <p>●テマ3③ ホテル 8:45 10:00/12:00 12:40/13:40 14:15/17:00 18:00 頃</p> <p>●テマ4④ ホテル 8:15 8:30/11:00 11:45/12:45 13:20/14:45 15:30/17:15 19:15 頃</p>	<p>朝: バイキング (ホテル)</p> <p>昼: 海鮮 夕: 餅内 ※餅内の種類は各部屋にて 21:00 料理</p> <p>夕: (各自) シンガポール名物ホーカーにて 自由夕食、(選別) ① 卵バクハク ② 卵バク</p>	<p>8 Sentosa Gateway Sentosa Singapore 098269 【TEL】+65-6577-8888</p> <p>1 部屋 3 名利用</p>	
10/18 (木)	<p>クママ観光コースの一日 ●1① ホテル 8:30 8:45/9:40 9:45 10:00/11:30 12:00/13:00 13:30/14:30 15:00/16:00 18:30/17:30 18:00/19:00 19:30/20:30 21:00 頃</p> <p>●2② ホテル 8:30 8:45/9:40 9:45 10:20/11:00 11:30/12:30 13:00/14:00 14:20/16:00 16:30/17:30 18:00/19:00 19:30/20:30 21:00 頃</p> <p>●3③ ホテル 8:30 8:45/9:40 9:45 10:00/11:30 12:00/13:00 13:30/14:30 15:00/15:50 16:20/17:50 18:15/19:15 19:40/20:40 21:10 頃</p> <p>●4④ ホテル 8:30 8:45/9:40 9:45 10:00/11:30 12:00/13:00 13:30/14:30 15:00/16:30 16:50/17:50 18:15/19:15 19:40/20:40 21:10 頃</p> <p>●5⑤ ホテル 8:30 8:45/9:40 9:45 10:00/11:30 12:00/13:00 13:30/15:30 15:45/17:30 18:00/19:00 19:30/20:30 21:00 頃</p>	<p>朝: バイキング (ホテル)</p> <p>昼: 煎茶</p> <p>夕: チキンライス</p>	<p>朝: バイキング (ホテル)</p> <p>昼: (各自)</p> <p>夕: スチームボート</p>	<p>【機 中】</p>
10/19 (金)	<p>特別自主研修の一日 ウォーターフロント駅スタート(セントーサエクスプレス) ホテル...シンガポール内 B & S プロگرام 9:00 ホテル出発 17:00 集合予定 18:00/20:00 20:45 頃</p> <p>生徒1班(6~7人)に1人の地元大学生が同行し、交流しながらシンガポール市内を散策するプログラムです。【チェックイン時間/12:00~12:30です。】 【チェックポイント】①Chinatown 駅【マックスウェル・ラフォーセター】②URA シティキヤリー・船入口 ③Esplanade 駅又は Promenade 駅【サンテックシティモール】④東急ハンズ前 ●お困りの際は下記2箇所/JTBラウンジが緊急対応● ①バンパンウィックシンガポール内 2 階 05:30~22:00 ②マリナーベイサンズ(タワー2)コーチベイ B1 階 14:00~20:00</p>	<p>朝: バイキング (ホテル)</p> <p>昼: (各自)</p> <p>夕: スチームボート</p>	<p>朝: 餅内 昼: (各自) 夕: 中華</p>	<p>【機 中】</p>
10/20 (土)	<p>S0 シンガポール航空 618 便 ※入国審査 貸切バス チャンギ空港 → 関西国際空港 → 大和八木駅 01:25 発 9:05 着/10:30 11:45~12:15 頃 (航空機の到着時間・入国審査に要する時間でご案内します。)</p>	<p>朝: 餅内 昼: (各自) 夕: 中華</p>	<p>朝: 餅内 昼: (各自) 夕: 中華</p>	<p>朝: 餅内 昼: (各自) 夕: 中華</p>

■S0=シンガポール航空 ■上記スケジュールはあくまで予定で、航空会社のダイヤ変更や現地諸事情により大幅に変更となる可能性があります。予めご了承ください。

(6) 海外との学校交流について

本年度は、例年恒例となった国際課の依頼による学校交流に加えて、昨年度の交流を受けた海外への訪問事業を一つ実施した。まず、恒例の交流については、例年どおり第1学年を中心にするため、各クラス2名の海外交流委員を中心に交流を行った。

【台湾・台南第一高級中学】

1 概要

奈良インバウンド促進事業の一環として、海外からの訪日教育旅行の一層の誘致を目指した学校交流を県観光プロモーション課からの要請により本校で受け持つことになった。

日 時 平成31年1月28日(月) 午後

受け入れ 生徒 72名

引率者 6名(校長が団長、PTA会長、ガイド1名含む)

対応生徒 第1学年 計400名

2 プログラム内容

- | | |
|-----------------|--|
| 12:30頃 | 畝傍高校到着(大会議室へ)
1年海外交流委員各クラス2名(昼食後(13:05)、大会議室に集合) |
| 13:10~13:20 | 歓迎セレモニー
(1)畝傍高校校長より挨拶
(2)訪問団代表挨拶
(3)記念品交換
(4)生徒代表生徒挨拶
(5)バディ紹介(クラス担当紹介) |
| 13:25~14:15(5限) | 授業見学(1年各クラス)
1年各教室へバディが誘導する |
| 14:25~15:15(6限) | 文化創造館で交流会
学校交流(プレゼンやレクレーションなど) |
| 15:30~16:30 | 校舎見学・クラブ活動見学
(交流委員が中心になってグループで校舎(部活動)を見学する) |
| 16:30~17:00 | 送別会
(1)生徒代表挨拶
(2)訪問団代表挨拶
(3)集合写真撮影
(担当教員と交流委員でお見送り) |



3 総括

昨年度に続き台湾の学校との交流ということで、海外交流委員を中心に、歓迎セレモニーから交流会のレクリエーションの準備まで、しっかりと行ってくれた。先方の学生のほとんどは英語も流暢であり、中には日本語でも会話が可能な学生がいるなど、交流にはほとんど支障はなかった。また、先方の学生だけでなく先生方もフレンドリーに接してきてくれたおかげで、終始和やかな雰囲気プログラムを進めることができた。

プログラムが午後からということもあり、半日間だけではあったが、部活動などもたくさん交流できて生徒たちも喜んでいて。また、1年生400名は、今年の10月に台湾へ研修旅行に行くこともあり、生徒たちも積極的にコミュニケーションをとっているように感じた。交流委員のほとんどの生徒が、最初は戸惑っている部分もあったが、時間がたつにつれてお互いに積極的に交流するようになり、このような機会があれば、また是非とも参加したいと感想で述べていた。半日間という短い時間であったが、お互いに有意義な時間を過ごせていたと感じられる。是非とも来年度以降も続けていきたいと感じた。



1日目（9月18日（火））

まず伊丹空港から羽田空港に向かい、さらに羽田空港から成田空港へバスで移動。成田空港を発ちシアトル・タコマ空港に到着した。昼過ぎにホテルに着いて間もなく、ワシントン州日米協会ボランティアによるウォーキングツアーに参加した。シアトルの観光名所である、Chihuly美術館やパイナップルプレイスマーケットを観光した。

2日目（9月19日（水））

朝からローカルツアーが開催され、本校生徒は日系アメリカ人の歴史を学ぶツアーに参加した。Japan Cultural Community Center Of Washington Seattle、NVC Memorial Hall と Panama Hotelを訪れ、当時の様子が見える資料を見ながら、日系アメリカ人二世の方々から話を聞くことで学びを深めた。夕方からはクルーズに乗船し、船内でオープニング式典に参加した。ワシントン州副知事やシアトル市助役より挨拶があり、その後本校の生徒が日系アメリカ人と日米交流についてのプレゼンテーションを行った。また、高知県で開催された「万次郎英語弁論大会」の特別賞受賞者の中学生・高校生によってスピーチも披露された。シアトル曾長の誕生地と言われるブレイク島で下船し、ティリカムビレッジのロングハウスで歓迎レセプションが開かれた。先住民の伝統的な歌や踊りを観賞し、在シアトル日本国総領事をはじめとする来賓者によるスピーチとジョン万次郎とホイットフィールド

船長の子孫による地球儀交換の儀式が行われ、参加者全員でサミットの開催を祝福した。

3日目 (9月20日 (木))



シアトルを離れ、ホストブラザー・シスターが通う高校があるマウントバーノンへ移動した。マウントバーノンはシアトルから北へ1時間、カナダとの国境に近く、山と海に囲まれた自然豊かな町であった。到着後、学校では避難訓練が実施されており、本校生徒も参加した。到着して間もなく本校とは異なる校風や生徒のようすを体感した。その後、それぞれのホストブラザー・シスターと対面した。これから数日間を一緒に過ごすファミリーとの対面に、当初生徒たちは緊張していたが、ホストブラザー・シスターはとても友好的で、積極的に話しかけたり質問をしたりしたおかげで、すぐに打ち解けることができているように思う。その後本校生徒が日系アメリカ人の歴史と日米関係についてのプレゼンテーションを行った。生徒たちはテーマについて日本で1から学び、お互いの意見を出し合いながら伝えたいメッセージをまとめた。発表前は自分たちの発表がどのように受け入れられるか不安を感じていたが、発表後スタンディングオベーションを受け、生徒たちは大きな達成感を感じていた。その後、生徒たちはホストファミリーと一緒に授業を受講した。授業はすべて英語のみで行われ、日本と異なる授業の雰囲気や特色ある内容に生徒たちは戸惑いながらも、その違いを前向きに楽しむことができているように思う。授業に参加した後はそれぞれのホストファミリー宅へ帰り、最初の夜を一緒に過ごした。

4日目 (9月21日 (金))



生徒たちはホストファミリーとともに登校した。昨日、日本を出発してから初めて仲間たちと離れ、ホストファミリーと一晩過ごして、コミュニケーションの壁に衝突したようだった。相手の言うことが分からず、自分の言いたいことも伝えられず、落ち込んでいた者が多かったが、ホストブラザー・シスターと懸命に意思疎通をはかろうとする姿を見ることができた。当日授業は午前中のみで、午後はそれぞれのホストファミリーと一緒に過ごした。夜には学校でアメフ

ト部の練習試合があり、多くの生徒がホストブラザー・シスターと観戦して、アメリカの高校生への愛校心の強さを感じた。

5日目 (9月22日 (土))

生徒たちは終日ホストファミリーと一緒に過ごした。ホストファミリーとハイキングに行ったり、ショッピングモールで買い物したり、中にはホストマザーの従姉妹の結婚式に参加させてもらった者もいた。どの生徒も会って間もないホストファミリーに本物の家族のように接してもらいながら一日を過ごした。



6日目（9月23日（日））

午後マウントバーノンからシアトルに戻り、ハイアット・リージェンシー・レイク・ワシントンでクロージング式典とフェアウェルパーティが開催された。式典では、在シアトル総領事やワシントン州日米協会理事長からの挨拶、また次回サミット地である兵庫県・姫路市の紹介があり、参加者は別れを惜しみながら次回の開催に期待を示していた。生徒たちはホストファミリーとの別れを涙を流して悲しんでいた。

<総括>

参加した生徒たちは以下のような感想を記している。

- ・自分の国の事など自分の知らないことがたくさんあり、これから一層勉強していきたいと思った。
- ・外国に出て自分の視野の狭さがわかった。世界で活躍したいと思うようになった。
- ・「空気」という概念は日本特有で世界では通じないので、自分を表現していかなければならないと思った。

以上の彼らのコメントからも今回の経験を通して彼らの意識・価値観が大きく変化したことが察せられる。プログラムへの参加を通して多くの人々に出会い、ホームステイでは仲間と離れて日本語が通じない環境でホストファミリーと過ごした。コミュニケーションの難しさを感じると同時にその醍醐味も味わい最終的には言語を超えた深い信頼関係を築くことができていた。また、学校では校風や生徒たちの様子を日本と比べながら、自分たちが見習うべき点を見つけていた。また、サミットに参加する姿勢にも変化が見られた。初めは受身的に参加していたが、終盤には、ほかの参加者に自分から話しかけに行き何かが得ようとする姿も見られた。海外から日本・自分自身を見つめ直すことで視野を広げ、主体性を身につけた生徒たちの今後の取組に期待したい



③エンパワーメントプログラムの取組

カリフォルニア大学デービス校国際教育センターの藤田斉之氏がカリキュラムを作成し、ISA社が独自に開発したプログラムである「エンパワーメントプログラム」(Empowerment Program)を、冬期休業中の12月24日から28日までの5日間、本校を会場に開催し、52名が参加した。

「グローバル時代を生きる上で必要な人間力を鍛える」ことをプログラム趣旨として、第1日目がポジティブシンキングの重要性について、第2日目が自己のアイデンティティと畝傍高校の魅力を世界に発信することについて、第3日目がリーダーシップの重要性と社会貢献の方法について等というものであった。また、第4日目が効果的なプレゼンテーションの在り方、将来の目標を達成させるための取り組みについて、そして最終日の第5日目が自分の夢や目標についてである。どの内容についてもアメリカ人のファシリテーターのもと、日本への留学生1人が本校生徒5～6人のグループに加わり、グループディスカッションの形で、すべて英語で話し合いが行われた。

最初は緊張していた参加生徒も、グループディスカッションを行ったりプレゼンテーションの指導を受けたりすることによって、英語で堂々と討議するようになり、最終日の個人プレゼンテーション

では多くの生徒は、原稿を見ずに見事なスピーチを行った。また、ボディムーブメント等も行う生徒も2, 3割いた。このことは、ただ、自分の意見や主張を発表するだけでなく、聞き手にきちんと伝えたいという強い想いの表れであると考えられる。

このプログラムに参加した生徒の主な感想は、以下の通りである。

- ・外国人と意思疎通ができることの喜びを感じた。
- ・自分の考えを一生懸命伝えることの大切さを学べた。
- ・失敗を恐れなくなり、自分の思いを伝えたい気持ちが強くなった。
- ・視野や世界観が変わり、聞くことや伝えることの難しさを知った。
- ・留学生との交流を通して、外国の文化について興味を持った。
- ・どんなことでもやればできる！という **Positive Thinker** になった。

今回のプログラムに対する満足度を問う項目においては、受講者全員の内96%が「非常に満足」、残り4%が「満足」と答えた。その中でも特に「留学生とのグループディスカッション」や「英語でのプレゼンテーション」では高い満足度が示された。「自分のことを **Positive Thinker** (ポジティブ思考) だと思いますか」という問いについては、受講を通して **Positive Thinker** だと答えた生徒が22%から58%に増え、**Negative Thinker** だと答えた生徒は56%から23%へと減少した。また、「自分は価値ある存在だと思いますか」という問いに対しても、肯定する生徒が65%から90%に増え、語学力の向上以外にも、大きな意識改革があったことがうかがえる。プログラムの中で意見を多く求められ、どんな些細な意見でも尊重されて交流に活かされるという経験を通して、自己肯定感を強く持つことができる生徒が増えたのだと考えられる。

このプログラムに参加することによって、ほとんどの生徒は英語で自分の考えや思いを述べることに自信をもつことができたとともに、英語学習へのモチベーションを上げることができた。

本校教員も英語科教員を中心にオブザーバーとして参加し、あらためて英語のみで行うディスカッションやプレゼンテーションなどのコミュニケーション活動の価値を再認識し、学校設定科目である「グローバル英語」を中心とした授業の中で生かしていく必要性を感じた。今後は、ポストSGHの教育課程の中でそれらをどのように位置づけ、継続していくことができるかを考えていかなければならないと考える。





(7) その他

○資格取得の取組

① GTECの取組について

1) 結果

本年度も第1学年及び第2学年生徒を対象に7月と12月の2回にわたってGTEC for Studentsの受験を実施した。第1学年についてはBasic、第2学年はAdvancedを採用した。両学年ともに7月にはReading, Listening, Writingの3技能、12月には3技能に加えSpeakingも実施した。以下に4技能についての各学年生徒のグレードの平均を示す。なおトータル欄には、Reading, Listening, Writingの3技能の平均値が示されている。

【第1学年（平成30年度入学生）】（今年度受験した計2回分を掲載）

	Reading	Listening	Writing	Total	Speaking
1年 7月	Grade 5	Grade 3	Grade 4	Grade 4	実施せず
1年12月	Grade 5	Grade 3	Grade 4	Grade 4	Grade 3

実施したそれぞれの技能測定で Grade 6 以上（CEFR の B 1 の基準に一致）生徒の人数を以下に示す。

	Reading	Listening	Writing	Total
1年 7月	75	48	0	14
1年12月	89	48	0	18

【第2学年】（昨年度からこれまで受験した計4回分を掲載）

	Reading	Listening	Writing	Total	Speaking
1年 7月	Grade 4	Grade 3	Grade 4	Grade 4	実施せず
1年12月	Grade 5	Grade 4	Grade 4	Grade 4	Grade 3
2年 7月	Grade 4	Grade 4	Grade 4	Grade 4	実施せず
2年12月	Grade 5	Grade 5	Grade 4	Grade 5	Grade 4

実施したそれぞれの技能測定で Grade 6 以上（CEFR の B 1 の基準に一致）生徒の人数を以下に示す。

	Reading	Listening	Writing	Total
1年 7月	75	48	0	15
1年12月	119	53	0	19
2年 7月	30	61	0	13
2年12月	49	104	0	33

2) 結果の考察と来年度の課題

両学年ともに、12月の結果からは学年全体のスコア伸長が見られる。個々に課題はあるものの、様々な場面で英語を活用してきた成果の一つであると言える。この伸長が生徒ひとりひとりの今後の英語学習に対する励みとなることを期待する。

1年生では、日頃のいずれの授業においても、英語を英語のまま理解できるよう授業を組み立てている。4技能をバランス良く伸ばすことを考え、その重要性を生徒に伝えながら授業を展開してきた。Reading に関しては、WPM も全体的に上昇が見られ、WPM が 120 以上の生徒数は 49 人から 62 人へと増加した。Listening に関しては全国平均を大きく上回ってはいるものの、下位層も厚く、今後全体的なスコアの引き上げが課題である。語彙力や文法力の増強にも力を注ぐ必要があると考える。Writing では、Basic のスコアの上限が 160 に設定されているため、Grade 6 以上の生徒数は 0 になっている。Grade 5 の生徒数は 22 人から 144 人へと大幅に増加した。グローバル英語等の時間に、論理的に英文を組み立てる練習を積み重ねてきた成果であると考えられる。Speaking のスコアは昨年度入学生と概ね同じではあるが、昨年度より Grade 5 以上の上位層が減少している。観点別に見ると発音やイントネーションが不適切であるとされた生徒数が半数おり、今後の課題である。しかし、Grade 1, 2 の下位層は大幅に減少していることは大きな成果である。入学時より授業で Discussion に取り組み、即興で自分の意見を述べることを続けてきたためと思われる。また、英語を使用して意見を相手に伝えようとする生徒の姿勢が少しずつ前向きなものになってきている。

2年生は、特に留学から帰国した生徒たちやアドバンスドコースの生徒たちが、お互いに良い刺激

を与え合いながら、学年の大きな牽引力となっている。上位層には実用技能英語検定で成果を発揮している生徒も含まれており、積極的な学習姿勢が見られる。授業では、生徒が英語を使用する活動を可能な限り確保し、継続してきた。特に学校設定科目『グローバル英語』では、ALTとのTeam Teachingにより、英語で考え、相手に伝えることを実践している。日本語を介さないことで、英語の情報処理の正確さや速度が徐々に上昇しているのではないかと思われる。Reading のスコアは今年度7月に若干低下している。これは問題のタイプがBasic からAdvancedへと切り替わったため問題の難化に十分対応できなかったためだと考えられる。12月にはスコアが再上昇し、グレード6以上の生徒数も大幅に増加した。コミュニケーション英語の授業で、精読、速読等様々な読み方を経験したこと、音読に時間をかけていること、朝のSFUの時間を利用して語彙や文法の増強に取り組んでいることなどが成果をもたらしたと考えられる。Listeningについては、入学時より着実に伸びてきている。今年度の6月の回に比べ、12月の回ではGrade6以上の生徒数が64人から104人へと大幅に増加している。ALTとのTeam-teachingを主体としたグローバル英語での様々な言語活動の中で、生徒たちが主体的に情報を取得できる能力を培ってきたと実感している。Writingでは、Grade6の生徒数が0になっているのはAdvanceのスコアの上限が170に設定されているためである。Grade5に相当する生徒数がやや減少しているが、観点別評価に着目すると、99%以上の生徒が自分の意見に対する理由を書けている点が評価できる。入学以来、かなりの量の英語を書く活動を継続し、主題と理由、その根拠を書くことを徹底してきたことに起因すると考えられる。今後は、文法的正確さ、使いこなせる語彙の増加に加え、多角的な視点から自分の考えを説明し、関連性を持たせて主張につなげる文章を書く力を伸ばしていきたい。Speakingについては、身近な話題について質問に回答できる力、理由を添えて意見を述べる力は全国平均を大きく上回っているのが大きな成果である。普段の授業ではペアで話す活動を必ず取り入れており、相手に伝わるように話す姿勢がかなり身につけてきたと感じている。客観的な評価に耐えうる語彙・文法の正確さ、発音、流暢さが今後の課題である。

第3章 研究開発の内容

2 その他の取組

○教育研修の実施

① アクティブラーニングに関する職員研修

平成30年3月に公示された新学習指導要領の中で、これからの生徒に必要な学びとして「資質・能力を育むための課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」が掲げられている。この学びを実現するためには旧来の講義型の授業ではなく、生徒が能動的に学習するアクティブラーニングの手法が必要となった。これらの事から本校でアクティブラーニングに関する職員集を実施した。

【研修内容について】

講師 中島由起子（学校法人河合塾教育イノベーション本部教育研究部）

日時 平成30年8月20日 13時30分より

内容

アクティブラーニングが必要とされる背景

教育力に「学生が何をできるようになったか」を指標とする視点が必要となった。また、アクティブラーニングの前提は高大接続改革が目指す人材像、社会で活躍するために必要な能力・スキルの育成となっている。そこで、高校では身につけた知識を活用し、自らの問題意識に従った問題解決を行う「探究」を重視していかないといけない。

現在、各大学個別入試において、「学力の3要素」「調査書の活用」が打ち出されており、高校での学習内容が今以上に問われることとなる。また、大学では高校でアクティブラーニングを行っている想定し、カリキュラムを作っており、高校に入学してくる生徒は、小学

校・中学校でアクティブラーニングの授業を経験してきていることから、高校における授業の改革は本当に必要となっている。

アクティブラーニングの授業について

授業方法としては、反転授業（一斉授業部分を動画として事前提供し対面授業は学生の主体的・協調的な学び）やジグソー法（テーマに関する資料を分割し、同じパートを選択した生徒同士が内容を確認し共有する。各生徒が元のグループに戻り資料の説明を行い、統合して全体の理解を構築し、問題解決を行う）などがある。これらの授業実践では、「理解深化型」「意見発表・交換型」の内容が多く、これらの活動としては「思考・表現力」「課題解決力」「社会的スキル」を重視している。学習成果の評価方法や指標としては、「学びの結果・成果の評価」「学びのプロセスの評価」「学びの質や深まりを評価」「学びの記録・蓄積を評価」することで多面的な評価が必要である。

全国の高校でのアクティブラーニングの取組からのポイント

生徒も教員も気負わず取り組める、小さな導入から始めることが第1歩となる。教員は、学びあい、教えあいの雰囲気がある授業をつくるのがポイントとなる。さらに、学校として組織的に実施することが大切である。

【本校での取組として】

すでにアクティブラーニングを実施している授業も多くあるが、何故この学びが必要とされているかがよく理解できた。また、これから取り組む場合のヒントも多く学ぶことができた。この内容も取り込み9月から、各教科で公開授業を実施し、さらに研修内容についての理解を深めることができた。

② 課題研究に関する職員研修

新学習指導要領の改訂により「探究活動」の重要性が大きく高まった。背景として社会や産業の構造が変化していく中、これからの時代に求められていく資質・能力として「自分なりに試行錯誤し新たな価値観を生み出すこと」がある。

また、今後国公立大学入学試験を受験する30%から40%生徒が推薦型入試やAO入試を受験することから、各大学のアドミッションポリシーにおいて高校在学中の活動を重視する方向となってきている。

これらのことから、今後高校での必須の学びである課題研究の研修を実施した。

【研修内容について】

講師 岡本尚也（一般財団法人Glocal Academy 代表理事）

日時 平成30年11月21日 15時50分より

内容

1 校内体制の整備について

学習指導要領改訂の背景として、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育が必要となってきている。このために、「主体的・対話的で深い学び」が必要とされている。この学びを取り入れ実践していくのが「探究」である。新学習指導要領では「総合的な学習の時間」が「総合的な探究的の時間」と変更され、各教科名にも「探究」が付き、全ての教科で探究的な学習を行うメッセージが発せられている。また、高大接続改革により高校での活動を重視した大学入試になり、「探究活動」の学習である課題研究は一部の生徒が行うものではなく、全ての生徒が入試に直接関わるものになった。

課題研究を行うための校内体制の整備の出発点としては、資質・能力ベースの教育目標を掲げることである。このためには、各学校の建学の精神・理念と教育目標、さらには教育課程の結びつきを明確にすることが大切である。資質・能力ベースの教育目標とした課題研究指導に



より、年度末における評価や課題のチェックが明確化され次年度の指導が改善されていく。

以上の校内体制の整備を行い、業務の改善の明確化を計っていくことが、教育活動におけるプラスの循環を創り出していく。

2 課題研究の研究テーマの決定とその方法について

課題研究の中間目標は研究計画書の作成することである。研究計画書の作成には、社会の課題から研究テーマを見つけ、そのテーマからリサーチクエスチョンを見つけ出すことが必要である。また、リサーチクエスチョンに対する仮説を立てその検証を行う。これらの課程が課題研究を行う中での一つのサイクルとなっている。研究テーマを決める方法は新聞や一般向けの科学書などで知識を広げ、気になる項目を取り上げていくことから始まる。気になる項目を整理し、問いをたて、簡単に答えが出るものは調査・実験を行う。最終的には自分の興味のあることと社会・学術の課題の重なった部分が研究テーマとなっていく。しかし、高校生は知っていることと理解している事に圧倒的な開きがあるため、議論が深まらない危険性がある。この危険性を回避するために抽象的な言葉を、より具体的で客観的な言葉に置き換えていく訓練が必要である。

課題研究を実施し生徒の力を伸ばすためには、教員のスキルや体制の強化は勿論重要である。しかし、最も生徒の力が伸びるのは発表である。発表→フィードバック→発展→発表のサイクルを繰り返すことで、課題があらわになりその改善に力を注ぎ探究的な思考が深まっていく。

地域を出て行く生徒にとっては、高校の現場が地域の教育を受ける最後の機会となる。このことから高校は何を学ばせたいのかをしっかりと考えていかないといけない。課題研究を通して生徒にこれからの人生を有意義に生きる力を習得させてほしい。

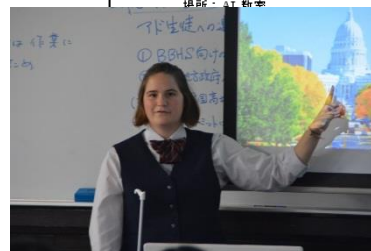
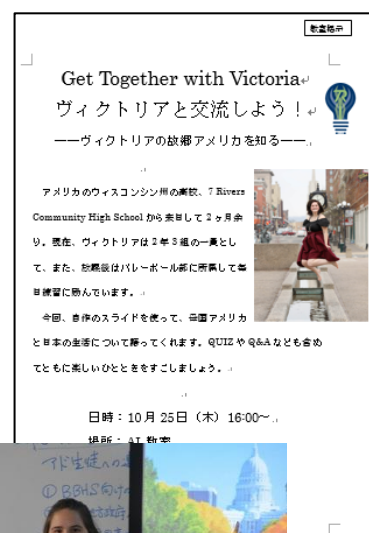
以上の校内体制の整備を行い、業務の改善の明確化を計っていくことが、教育活動におけるプラスの循環を創り出していく。

②留学生派遣及び受け入れのための取組

1. 長期留学生・短期留学生の受け入れについて

2018-19 年度国際ロータリー青少年交換学生として、2名の留学生を2学期から受け入れた。両名ともアメリカ合衆国から来日し、一人はウィスコンシン州、もう一人はコロラド州出身の女子生徒である。それぞれ、2年生と1年生に所属し2019年7月まで1年間の受け入れとなる。また、日本語の補習に月曜日から金曜日まで毎日1時限を日本語指導に当て、取り出し授業として行っている。

また、留学生との交流を図るため、2学期中間考査後の放課後に交流会を開催した。アメリカの高校生活についてのパワーポイントによる発表とその後の質疑応答を通じて、互いの共通点や相違点を確認しながら、和やかなひとときを共有することができた。所属するクラスだけでなく、放課後の部活動にも前向きに取り組み、交流の輪を広げてい



る。

2. 今年度留学に派遣した生徒について

2018-19 年度国際ロータリー青少年交換学生として、8月から1年間の予定で2名の女子生徒がアメリカ合衆国ミシガン州とコロラド州の高校に留学した。



次に、「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム【高校生コース】～」を利用して、2年生女子生徒1名がイギリス・ロンドンに3週間の短期留学を果たした。帰国後、エヴァンジェリスト活動として、帰国報告会を兼ねた「トビタテ！留学」の説明会及び相談会を2回開催し、7名の1年生がカウンセリングを受けた。留学計画書の書き方など実際の体験に基づいた説明により、参加者は留学の具体的なイメージを得ることができたという感想を寄せている。

また、「第28回日米草の根サミット2018」がアメリカ合衆国ワシントン州シアトルにおいて開催されるに当たり、本校から3年生7名と2年生7名、計14名が教員2名の引率の下派遣され、9月18日から25日まで7泊8日に渡って、種々の交流活動に意欲的に取り組み、両国の国際親善に寄与した。

3. 来年度の留学予定について

2019-20 年度国際ロータリー青少年交換プログラムに第1学年の生徒1名が応募し、来年度アメリカ合衆国に派遣が内定している。この制度は交換留学プログラムであるため、今年度と同様に来年度においても、交換留学生を受け入れる予定である。

次に、「第5期 トビタテ！留学 JAPA 日本代表プログラム【高校生コース】」には2名の1年生が応募している。アカデミック・ショート分野に1名、アカデミック・ロング分野に1名である。また、「AIG 高校生外交官プログラム」に3名が応募しているが、それぞれのプログラムにおいて2月現在選考結果を待つ状況である。

4. 本年度の成果と課題について

海外に広く目を向け、何かにチャレンジをすることで新しい発見をしてみたいと考える生徒は少なからずおり、問い合わせも増えている。各種プログラムがあるなかで、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」は、グローバル化が加速する世の中において、国際舞台で活躍できる人材を2020年度までに倍増させるという意図の下、文部科学省が民間から寄付を募り、官民共同で取り組む留学促進キャンペーンである。平成25年6月に閣議決定され、2019年度は5期生を送り出す予定で選考が進んでいる。本校からは当初16名の問い合わせがあったが、最終的に応募した生徒は2名であった。応募者が少数に留まる理由の一つは、「トビタテ！留学」が返済不要の奨学金制度であるがゆえに、その応募・選考にはかなりの労力と時間がかかる点であると思われる。

「トビタテ！留学」の特徴は、成績や語学力は不問とする分、明確な目的意識と独自性のある留学計画書を応募の際に出すことになっている。留学計画書には、留学の目的（テーマ）とその目的達成のために留学先で何を学び、経験したいかを論理的に記す必要がある。次に、留学する国や地域を絞り込み、留学先機関もエージェントなどを通じて情報を集め、最終的には自ら選定することになる。この過程で応募者は一から自分に向き合って、自分に何ができるのかをじっくり考え、主体的に行動しなくてはならない。これが単なる業者のプログラムと異なる点である。さらに、留学中に学修する授業や活動のほかに、自身で計画して行う「自主活動」や留学中の「リスク管理」、そして帰国後の「エヴァンジェリスト活動」（自身の留学経験を広く知らせる活動）について詳細に綴ることが求められる。しかし、いったん選抜されると、留学出発前や帰

国後の研修を通じて、全国から選抜された多くの高校生と知り合い、新たな視点と活力を得ることができる。この点については、既参加者を通じて証明されているので、学年の早いうちに、何らかの形で留学をテーマにこれからの進路を考えさせるホームルームなり、授業を行うことができれば生徒の意識も変わってくるのではないかと考える。実際に留学計画書を書くことは、自身の将来について深く考える機会となり、進路先への「志望理由書」を書くことにもつながっていくはずである。

また、留学生の受け入れについても、組織としての受け入れ体制を整え、本校の生徒にとっても留学生と共に学校生活をおくる経験から多くのことを学びあえる環境作りが必要であると考え